

PROGRAM NOTE

2002

近藤譲： イン・メディアス・レス

ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロとピアノのための

In Medias Res

for Violin, Viola, Cello, Piano

「イン・メディアス・レス」(in medias res)は、直訳すると「物事の半ばに」という意味のラテン語で、そこから、英語等の言語でも、「いきなり事の核心に」或いは「前置き無しに」といった意味の成句としてそのまま用いられるようになっていく。しかし、《イン・メディアス・レス》という題名をもつこのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロとピアノのための作品は、いきなり曲の「核心部分」から始まっているというわけではない。

私はいつも、文章全体よりも個々の文に、文よりも個々の単語に関心がある。そして音楽に於いても同様に、曲全体の成り行きよりも個々の楽句に、楽句よりも個々の音に興味を惹かれる。つまり、音楽全体よりも、音楽の各瞬間に興味の中心がある。したがって、私の音楽は、言わば、個々に独立した瞬間の連鎖であって、一曲全体が一篇の小説のように物語を語ったり、劇的成り行きを表したりする性質のものではない。その意味で、私の曲には、真の「始まり」も「中間」も「終わり」も無い。曲の始まりは、それが偶々曲頭に置かれたが故に「始まり」であるに過ぎず、それが「始まり」でなければならない理由は特に無い。「中間」や「終わり」についても同様であって、仮令それらの場所を互いに置き換えたとしても、音楽的には余り差し支えないだろう。言い換えれば、私の音楽では、その始まりも中間も終わりも、いつも、曲の「途中」なのであって、つまりは、言葉の語源的な意味で、「イン・メディアス・レス」なのである。

近藤譲

初演：2003年3月(静岡)

初演者：加藤知子(ヴァイオリン)、川本嘉子(ヴィオラ)、堤剛(チェロ)

岡田博美(ピアノ)

委嘱：静岡市文化振興財団

出版：University of York Music Press (UK)

録音：ALCD-67

演奏時間：18分